報　文

会話に参加するとはどういうことか
―ゴフマンと会話分析―

宮内　正*

What Does Participating in Talk Imply?
– Goffman and Conversation Analysis –

MIYAUCHI Tadashi*

The purpose of this paper is to characterize the perspectives of Goffman's analysis of talk and Conversation Analyses (hereafter called CA) in Ethnomethodology and to compare the theoretical frameworks of both disciplines in terms of the actual analysis of conversation in face-to-face interaction, or "talk-in-interaction".

Although both Goffman and CA seem quite similar to focusing upon how conversation goes about, their theoretical stances on conversation are very different and hard to be reconciled. Goffman tries to emphasize the significance of participants' co-present situation, while CA seems to concentrate on the formal characteristics of sequencing in conversation.

The following discussion will prove that Goffman's approach has more merit in carrying out the analysis of conversation as social interaction or talk-in-interaction.

Ⅰ．会話への関心のありかた

1．会話とはいかに成立・維持されるか

会話について，私たちはこれまで，「会話とは話し手と聞き手の二者間でコトバをやりとりする行為である」という対話モデルを基本に考えてきた。会話が成立し，維持されるためには，両者が共有する言語能力や共有知識と，両者間の社会関係にもとづいて両者が担う役割・地位のセットが必要である，という考え方である。言語学の分野においても，ソシュールの構造言語学やチョムスキーの生成文法に代表される「構造論的・形式論的パラダイム」では，流暢な話し手とは，人間固有の生得的な言語能力をもとに，音韻論的・統辞論的・意味論的・語用論的知識を習得したもののことである，という発想に立っている。コミュニケーション能力という概念もいわばこの延長線上にあるといってよい。こうした発想を要約するならば，会話とは，言語（文化）固有のコード（共有された規範），場面状況固有のコード（規範）が具体的なかたちで利用され・実践されることによって成立し・維持されるということになろうか。コードに注目するにせよ，個々の実践・プラクティスに注目するにせよ，一定の共有知識と関係性を前提に会話が成立するという発想は，いわば伝統的な言語学モデルにおいて，会話とは話し手と聞き手が相互に共有する言語能力と知識（潜在的能力，コンピタンス）にもとづいて個々のセンテンスを（まるで野球のキャッチボールをするように）やりとりする行為であるとみなされてきた。

2．会話とはいかに進行するか

ところが，近年，会話とはどのように進行するものなのか，という関心が高まりつつある。たとえば，言語学では，具体的な発話状況から切り離された抽象的な構造的単位であるセンテンスをおもな分析対象としてきたが，最近では，具体的な発話状況と密接な関連性をもつ，より具体的で社会的・機能的な単位である談話を新たな分析対象としている。人類学でも，部族社会における神話や物語や民間語彙の構造分析だけでなく，儀礼的パフォーマンスをひとつの談話（コミュニケーション）として捉える民族誌的研究（「談話（コミュニケーション）の民族誌」）が盛んになっている。もちろん，社会学においてもエスノメソドロジー・会話分析やゴフマンのトーク分析が話題になっている。いわば，会話そのものへの関

* 女子栄養大学文化学研究室：Culturology, Kagawa Nutrition University

心の高まりであり，会話の形式・メカニズムへの関心の高まりである。私たちの日常経験に照らしても，二者間の落ち着いた談話が，口角泡を飛ばすような白熱した議論になることもあれば，冗談を交えた笑いの絶えないおしゃべりになることもある。すなわち，いろいろな会話があり，会話は多様な変化をとげるものであるといえるのではないか。また，ときには，相手が自分の話を聞かずに上の空でいることにふと気づいたり，話しているうちについ夢中になり，相手の反応をほとんど無視して話していることに気づいたりすることもある。これらの身近に経験する会話例は，前述の対話モデルを前提にすれば，いささか周辺的な事例や逸脱的な事例と見なされるかもしれない。しかし，はたしてそう見なしてよいものだろうか。会話の形式の多様性を考えることは，会話の複雑なダイナミズムを解明することであり，当然ながら，その会話にかかわる人たちのかかわり方や会話における役割や立場を考え直すことになるはずである。

II．ゴフマンと会話分析

1．分析方針の違い

会話とは具体的にどのようなものとして捉えればよいか。ここでは，ゴフマンの相互行為研究（とくに後期のトーク分析）を中心に，いわゆる「会話分析」の研究成果などとの比較を行いながら，この問題を考えてみよう。

会話とは複数の人間が自然言語をもちいて情報交換をする活動であると定義するならば，会話はまぎれもなく社会的相互行為であり，社会的相互行為の大半を占めるものであるといえよう。もちろん，じっさいには，電話という音声情報だけを伝えるメディアを利用して会話する場合も少なくない[注1)]。がしかし，ここでは，相互行為としての会話のもっとも典型的な様態である，対面的な場面状況で展開される会話（近年では「相互行為におけるトーク（talk-in-interaction）」ともいう）を考察の対象とする。

この「対面状況における会話」という対象そのものは，エスノメソドロジーにおける会話分析においても，ゴフマンの相互行為研究においても，ほぼ共通しているが，それぞれの研究における分析対象の位置づけは大きく異なる。

エスノメソドロジーにおける会話分析は，「人々は，意識するとしないにかかわらず，自分たちの方法をもちいて，社会というものを作り上げているのだ」というエスノメソドロジー（研究）のひとつの実践にほかならない。会話分析では，きわめて微細な（ある意味では原初的な）「社会的なもの」が会話という相互行為にあらわれるという。会話者がお互いの発話をその場その場に応じて秩序化して会話を続けていく，その具体的な実践において，社会＝秩序がその場その場で形成されると考える。したがって，会話とは，会話の秩序化そのものであり，（会話分析家たちのいう）相互行為の秩序化そのものであり，「局域的な秩序形成」の現場にほかならない。

一方，ゴフマンの相互行為研究は，相互行為には「固有の自律的秩序」があるという前提に立つ。この「自律的秩序」とは何か。ゴフマンは，著作によっては演劇論やゲーム理論や生態学的心理学や動物行動学の概念を援用した研究もあるが，基本的には相互行為を対人儀礼が展開される場として捉える。したがって，ゴフマンが「相互行為秩序」というとき，そこには，行為者がお互いのフェイス（対他的な自己イメージ）を維持しあう儀礼秩序と，それを支えるメカニズムとが同時に存在していると考えるべきであろう[注2)]。

かくして，会話分析における，その（禁欲的ともいえる）方法論的問題意識（「方法論的無関心」）は，じっさいの分析者に対して，できるだけ「社会的行為の詳細を厳密に，経験的に，そして形式的に扱うことのできる自然主義的な観察科学」（Schegloff, E., and Harvey Sacks, 1973）をめざすべく，当面は，いまここで（その場で）起きていることに徹底した関心を集中させることを課している。それに対してゴフマンは，その考察対象のもつ固有性に着目して，その独特の多元的リアリティに迫ろうとしている。あえていえば，前者は「方法の徹底」に，後者は「対象の把握」にこだわっているといえよう。

こうした方針の違いは，当然ながら，考察対象である「対面状況における会話」の捉え方の違いに反映される。

2．分析対象の違い

会話分析家もゴフマンも「相互行為における会話」に注目する点ではあまり変わらないが，「自然主義的な観察科学」を志向する会話分析家たちは，客観的に観察可能な相互行為のシークエンス（継起的順序）（その典型が会話のシークエンスである）に焦点を絞り，そのシークエンスがいかにシステマティックに組織化されているかを分析する。ほとんどもっぱら観察可能な会話データ（つまりは録音された音声データ）そのものに限定した分析を行うことで，文化的・社会的・心理的要因が介在することをできるだけ排除しようと努め，また（完全とはいえないとしても）十分にそれが可能だと考えた。

一方，ゴフマンは早くから民族誌的なフィールドワークという手法を用いて（Goffman, 1953），相互行為あるいはコミュニケーション行為という対象に密着して，それをできるだけ詳細に記述することを目指した。とりわけ，人間が相互に知覚可能な範囲に居合わせる状況のなかで起るさまざまな行動や出来事に注目した。ゴフマンの問題関心は，複数の人間がお互いに相手の行動をモニターできる共在状況（「対面的な集合態」「集まり」「出会い」）のなかでしか起らないこととは何かということである。人間が知覚可能なほどに接近している状況においては，身体的行動（視線・身振り・姿勢・表情・外見）も言語的行動（発話）も等しくコントロールすべき対象であり，そのセルフ・コントロール（モニタリング）の如何がお互いに観察可能な状態におかれている。したがって，この共在状況における行動はつねに相手に何らかの

意味を伝えてしまう可能性をもつ行動であり，いわば，行為者本人の意図を越えて一人歩きする意味，すなわち表出的意味をもつ行動にほかならない。ゴフマンにとっては，この表出行動を秩序化すること・組織化することこそが相互行為にほかならない。

したがって，ゴフマンの分析では，言語（会話）が分析対象として特別扱いを受けることはなく，身体的行動も言語的行動も同等に扱われ，そればかりかどちらも同じ表出行動として扱われる。言語的行動も身体的行動と同様，基本的には，本人の意図を離れて相手に何らかの意味を伝えてしまう可能性をもつ表出行動とみなされるので，話し手の意図にもとづいて行われる「発話」を分析の主題に据えるという発想はない。ゴフマンの扱う言語的行動が，ふつうの会話だけでなく独り言や呟きや呻きといったセルフトーク・反応的叫び，さらには講義やラジオ放送を考察対象とするのはここに理由がある[注3)]。

3．分析概念の違い

このように，対象の捉え方が異なれば，そこで用いられる分析概念も異なる。

時間の直線的な流れにしたがって継起的に会話が進行すると考える会話分析においては，具体的には二つの基本概念がある。ひとつは「発話の順番取りシステム」，もうひとつは「隣接対」である。前者は，私たちの日常会話には「原則として一度にしゃべるのはひとり」でほとんど間を開けずに「話し手はつねに交代する」という基本的な特徴があることから，会話のシークエンスを，個々の発話の順番がつねに交代していくシステムとして捉える概念である（Sacks, H., E. Schegloff and G. Jefferson, 1974）。会話がスムーズに続いていれば，それは，このシステムが会話の参加者たちによって実現されていることを意味する。このシークエンスをさらに細かくみると，いまの発話とその次に続く発話とのあいだに，たとえば「挨拶—挨拶」「呼びかけ—応答」「質問—応答」「要請—受諾」といった，一対の組み合わせ（ペア）として類型化できるものを見つけることができるという。これを隣接対という。私たちはふだんとくに気にすることなく，この隣接対の第一成分（たとえば質問）を用いて，相手から次の第二成分（たとえば応答）を引き出すということをしている。したがって，この隣接対とは，会話を組織化し相互了解を形成するための資源であり，この隣接対によって場面固有の，ある意味では最も小さな秩序が生成される。

とはいえ，会話分析におけるコンテクストの取り扱いは微妙である。たとえば，隣接対として二つの隣り合った発話に一定の関係性を見つけるとき，その発話の意味とは，具体的にはその固有の発話（utterance）というよりも，むしろ，その抽出された言語形式（それを含む談話タイプ）を手がかりに，それが挨拶か質問かを確定しているようにみえる。しかも，その挨拶・質問といったカテゴリー自体は，たとえ普遍的で中立的な概念であるとしても（その保証はどこにあるのだろうか），すくなくとも，それらのカテゴリーは具体的な発話場面とは切り離されたある種の社会文化的カテゴリーとして導入されたものといえよう。

同様の問題は，発話内に登場する直示的表現にもあてはまる。たしかに「いま」「ここ」といった表現（発話というよりも言語形式？）が個々の文脈に依存して，その意味内容が変化するという（ゆえに文脈依存性があるという）。しかし，さらに別の表現「さっき言ったあれ，頼むよ」「ああ」，「このあいだいったあそこ，よかったね」「そうだね」などの発話にみられるように，それぞれの発話の局域とは，発話が行われているコンテクスト，発話者間に共有されている知識（社会的文化的な知識も含む）などをも含むものでなければならない。少なくとも，隣接対の関係性を認定するさいに（すなわち会話を分析するさい），コンテクストに含まれる要素を暗黙のうちに前提にしているのではないか。この点は，トランスクリプトにもとづく会話分析のひとつの課題ではないだろうか。

では，ゴフマンの分析概念はどうか。ゴフマンも，会話分析家が会話のスムーズな進行に関心をもつのと同じように，共在状況における出来事のスムーズな流れに関心をもつ。このことは，一見，同じ現象を別の表現で言い換えているようにも聞こえるが，ゴフマンはここで「共在状況」と呼ばれる状況を厳然たる前提条件として位置づけている。共在状況にいるがゆえに，そこでの身体的・言語的行動は一定の表出的意味を発してしまう。かくして，それらの行動は長い時間の経過とともに定式化され，それらの行動を引き起こしてきた状況も同時に類型化されると考えられる。その結果，定式化された行動（あるいは行動形式）を行うことで，自分の置かれた状況，とりわけ自分の意図について，相手にとって容易に読解可能な表出を提供できるようになる（このことを儀礼化ともいう）。さらには，その行動形式を目撃した者たちからの効率的な反応を引き出すことができるようになり，その目撃者たちに行動主体からのさらなる反応を効率的に示すことができるようになる（Goffman, 1979: 1）。したがって，定式化された行動（あるいは慣習的プラクティス）は，行動主体の状況への関与・反応・取り組み（involvement, response, alignment）を指し示すという意味（機能）を一義的にもち，そうした状況への関与を示す「証拠」として機能する[注4)]。

こうした「証拠」群を探し集めることがゴフマンの研究テーマであり，ときにそれらをフレイミング，フッティング，役割距離などと概念化することがあるとしても，それらは分析概念というよりも，そうした「証拠」群を整理するための分類概念に過ぎないというべきだろう。したがって，状況への関与を示す行動形式がどのような出来事・リアリティ・フレイムを支持しようとするのか（ゲームか，集まりか，演技か，会話か）によって，その行動形式を単位化する概念もさまざまである。それは，

ときにムーブであり，プラクティスであり，イディオムである。もっとも，ゴフマンの概念がしばしば，暫定的で体系性を欠き，具体的な分析に利用しにくいといわれるのは，それらがこうした特徴（一種の文化的・社会的概念）を備えているからに違いない。

Ⅲ．相互行為としての会話はどのように組織化・秩序化されるのか

1．組織化されるものとしての会話

たしかに，会話とは，現象としては時間的な継起関係のなかで一定のシークエンスを構成する言語活動であるようにみえる。しかし，日常の自然の会話の多くが共在状況で行われることを考えるならば，それは，ゴフマンのいうように，本質的には相互行為（あるいは相互行為の組織化過程）とみるべきであろう。ではいったい，この相互行為としての会話はどのように組織化・秩序化されるのか。ゴフマン自身は，会話をひとつのシークエンス（あるいはシークエンスとして組織化されるもの）として捉える会話分析を手がかりにしながら，この課題に取り組んでいる（Goffman 1976, 1981）。

2．会話の基本フォーマット

ゴフマンは，会話をシークエンスとして捉える会話分析にとって最も重要だとされる隣接対という概念を「根拠」に，会話分析には会話を二者間の対話として捉える志向があるといい，その対話モデルが果たして有効か否かを問う（Goffman 1976）。

ゴフマンは，実際の会話には，ひとつの成分に二つの要素が含まれていたり，ひとつの要素が二つの成分にまたがっていたりすることがあるので，この隣接対概念では必ずしもうまく会話を分析できないと指摘する。そこで，それを補足するものとして，質問―回答フォーマット，さらには，より包括的な言明―応答フォーマットというものを提案する。すなわち，ゴフマンは，会話分析には対話モデルが前提とされていると批判し（この把握じたい，のちにシェグロフ（Schegloff 1988）が反論することになるが），その「モデル」に従えば，隣接対として特定された発話には，「挨拶―挨拶」「質問―回答」連鎖という特定の結合的・相補的関係が含まれる（話者によってその関係性が付与される）ということにならないだろうかと主張した。

ゴフマンのいうフォーマットとは，実際の隣接対に見出される関係性というよりも，実際の会話はできるだけこのフォーマットに従うように組織化されるという，ひとつの秩序化原理あるいはフレイムではないだろうか。共在状況で発せられる個々の具体的な発話や身振りなどは，完全な文に復元することが困難であったり，命令や約束や要請などといった発話内的意図を確定できないような発話であったりする。言明―応答フォーマット（statements-replies）に近似したものを見出すことさえ困難なことがある。したがって，ゴフマンはこのフォーマットを，さらに包括的な，指示―反応フォーマット（reference-response）に置き換える。ここでは，会話参加者たちは状況に反応（response）して一定の行動が示されるまでは，その反応が何に対してなされたものかわからない，その反応ぶりをみて直前の話者が何をしていたかがあとから回顧的に指示される（reference），というフォーマットである。いわば，共在状況のもつ性質を最大限に考慮してできるだけ包括的なフォーマットを採用したのではないだろうか。たとえていえば，質問―回答フォーマットが質問と回答との必然的な連鎖「シークエンス」を想定しているとすれば，この指示―反応フォーマットは相手の反応しだいでどのようにも変化する「ダンス」を想起させる（Goffman, 1981: 73）。

3．会話の相互行為論的単位

同様に，会話を構成する単位についても，従来から用いられてきた発話順番，センテンス，発話などの単位は，いずれも言語分析を想定しているとの理由から棄却され，そのかわりに，ゲームの指し手を意味する「ムーブ（move）」という単位が採用される。ムーブとは，参加者のおかれているそれぞれの状況群と特定の関係にある発話や行動のことをいう。同じ指し手でもゲームが異なればその意味や機能が異なるように，同一の発話や身体行動でも，置かれた状況群が異なればそこでの関係は変わる。前述のフォーマットの指示や反応もそれぞれがムーブである。

4．システム拘束と儀礼拘束

こうした行動単位としてのムーブは，指示―反応フォーマットという，緩やかなフォーマットを維持しながら，システム拘束・儀礼拘束という二つの拘束を受けて組織化される。

システム拘束には，1）相互にメッセージをやりとりする能力，2）背景チャンネルを用いてフィードバックする能力，3）接触信号，4）切換信号，5）優先権を示す信号，6）フレイミング能力，7）応答者の規範，8）非参加者の規範がある。これらはいずれも共在状況において会話を維持するために必要な前提条件であるといえよう。しかも，このなかに順番取りシステムといった，シークエンスに直接結びつく条件が含まれていないところをみても，会話参加者が共在しているという時空間を前提にした相互行為の組織化・秩序化を考えていることがわかる（Goffman 1981: 14-5）。

たしかに，システム拘束は文化に左右されない通文化的なものだが，儀礼拘束はいわばそれぞれの文化によって異なるものであろう。しかし，にもかかわらず，ゴフマンがシステム拘束と並べて儀礼拘束をあげるのは，共在状況にある相互行為において参加者相互がお互いのフェイスを維持しあうことが，相互行為の秩序化・組織化において重要であるという認識があるからである。儀礼拘束についてゴフマンは，1）行為者の性格や彼の話を聞

く人たちの彼の評価などについての含意を伝えるとみなされる行為。2）相手を不快にしかねない行為は行為者が釈明や謝罪によって修復する。3）腹を立てた側はふつうはみずから進んで修復を図らなければならない，をあげる（Goffman 1981: 21）。

じっさい，ゴフマンは，儀礼を相互行為の秩序化原理とした儀礼モデル（儀礼フレイム）を提案し，さらには，儀礼的相互交換として，修復―救済―評価―最小化の組み合わせからなる会話を紹介している（Goffman 1981: 15-7）。

5．二元的システムとしての会話

共在状況における不安定で偶発的な複数の行為主体は，特定の伝達意図のあるなしにかかわらず，それぞれの身体的・言語的行動を何らかのフレイムにもとづいて秩序化しなければならない。そのため，基本フォーマットのもと，システム拘束と儀礼拘束がそれらの行動を二元的にモニターしコントロールする。こうした一連の秩序化・組織化のための活動そのものがいわば相互行為としての会話にほかならない。もっとも，共在状況であるがゆえに，お互いのフェイスを維持するべく，つねに儀礼フレイム（儀礼秩序）が作動するというわけでもない。ふとした振る舞いや発話が険悪な事態を招いたり無礼講に転じたりする。そのふとした振る舞いや発話を周囲の人がやり過ごすか注視するか，その反応ぶりによって，その相互行為は大きく変わる。無視するか注視するか（たとえば，顔をしかめる，舌を出す，無表情を装う）という指示―反応フォーマットのありようは，じつは共在状況という前提条件そのものを亡き者にしてしまう可能性をもっている。

Ⅳ．会話に参加するとはどういうことか

1．状況への関与という視点

私たちがふつう「会話」によってイメージするのは，およそ次のようなシーンである。二人の人間が相手の顔が見え相手の声が聞こえる距離にいて，共通の関心をもち，話し手は話す内容と聞き手の理解にすべての関心を注ぎ，聞き手は話を聞き取ることにすべての関心を注ぐ。しかも，そこで誰が話し，誰が聞き，何が語られているかということだけでなく，会話が進行中であるということそれじたいも，部外者には「アクセスできない」とされる（Goffman, 1981: 129）。

これまで，こうした会話を共在状況における相互行為の典型として論じてきたが，だからといって，その共在状況のなかで繰り広げられる（しばしば身体的動作を伴う）言語活動を，すべてこうした会話概念で括ることはできない。たとえば，小声で耳打ちしたり，相手に当てこすりをいったり，つい独り言をもらしたりする。講義や演説や朗読のようなモノローグもある。さらにいえば，スーパーのレジやショールームでの商品を媒介にしたやりとり，食堂や銀行や駅のカウンターでのやりとりなどが思い浮かぶ。社会的出会い（social encounter）や社会的集まり（social gathering）のなかで交わされる言語動作と身体動作には思いがけない多様性がある。その多様なやりとりを会話やトークや談話として概念化することは，そのやりとりのなかの言語形式として記述可能な部分をことさらに強調することであり，その歪んだデータ解釈が，結果として，儀礼原理と対話モデルに守られた私たちの会話観を強化することにならないとも言い切れない。

こうした問題意識から，ゴフマンは，行為主体が具体的な行動形式をつうじてそれぞれの状況にどういうかたちで関与するのかを「フッティング」として定義し直す。このフッティングという概念は当然ながらいわゆる「聞き手」「話し手」という概念が内包している状況への関与の仕方についての再検討を迫る。すなわち，これまでの「聞き手」の概念は，「参加地位」と置き換えられ，さらにはその「参加地位」が複数にまとまったものを「参加フレイムワーク」と定義する。また，これまでの「話し手」概念については，物理的な音声を発する「発声体」，発話をつくる「作者」，発話の内容に責任を持つ「本人」，さらにはその発話で話題とされる「登場人物」というかたちに分解され，その一方で，これらを一括して「作成フォーマット」という名称が与えられる。

2．コンピタンスから相互行為の形式へ

従来の「話し手」「聞き手」概念に従うかぎり，状況における関与のあり方がいかに多様なものであることがわかったとしても，その関与とセットになった個々の発話（utterance）そのものもまた，センテンスというレベルで類型化されて，その類型化された発話形式を運用できる能力として位置づけられ，それぞれの行為主体の「コンピタンス」として付加されていくに違いない。

ゴフマンの目論見は恐らく，こうした伝統的な言語観から離れて，共在状況のみならずその周辺領域をも含むかたちで展開する対面的相互行為というものの具体的な形式を，より詳しく精確に記述することにあったとみるべきであろう。

注

1）あえてそうした会話に研究対象を限定することの分析上のメリットも少なくない。

2）この儀礼秩序とそれを支えるメカニズムについて，トーク分析では，儀礼拘束・システム拘束の二重性として，より明示的に論じている。

3）ゴフマンが「対話モデル」を前提にしない理由についても同様のことがいえる。

4）ゴフマンの分析では，具体的な行動形式が状況の関与を指し示す指標性を indexicality という。この用法は記号論の創始者パースの原義に近い。ただし，一般的には，会話分析についてこの語を用いるときには文脈依存性という意味で用いる。

文　献

1) Atkinson, J. Maxwell, and John Heritage (eds.), 1984, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge Univesity Press.
2) Darwin, Charles, 1872, *On the Expression of the Emotions in Man and Animals*, London: John Murray. (浜中浜太郎訳, 1931,『人及び動物の表情について』岩波文庫)
3) Drew, Paul and Anthony Wooton (eds), 1988, *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Oxford: Polity Press.
4) Durkheim, Emile, 1912, *Les Formes élémentaires de la vie religieuse*, Paris: Alcan. (古野清人訳, 1975,『宗教生活の原初形態』(上・下) 岩波文庫)
5) Goffman, Erving, 1953, *Communication Conduct in an Island Community*, PhD Dissertation, University of Chicago.
6) Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday Anchor. (石黒　毅訳, 1974,『行為と演技』誠信書房)
7) Goffman, Erving, 1961, *Encounters*, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (佐藤　毅・折橋徹彦訳, 1985,『出会い』誠信書房)
8) Goffman, Erving, 1964, "The Neglected Situation," *American Anthropologist*, 66(6, part Ⅱ, special issue): 133-136.
9) Goffman, Erving, 1967, *Interaction Ritual*, New York: Doubleday Anchor. (浅野敏夫訳, 2002,『儀礼としての相互行為』法政大学出版局)
10) Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis*, New York: Harper & Row.
11) Goffman, Erving, 1976, "Replies and Responses," *Language in Society*, 5: 257-313.
12) Goffman, Erving, 1979, *Gender Advertisements*, New York: Harper & Row.
13) Goffman, Erving, 1981, *Forms of Talk*, Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
14) Goffman, Erving, 1983, "The Interaction Order: American Sociological Association, 1982, Presidential Address," *American Sociological Review*, 48(1):1-17.
15) Goffman, Erving, 1983, "Felicity's Condition," *American Journal of Sociology* 89(1): 1-53.
16) Goodwin, Charles, 1981, *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*, New York: Academic Press.
17) Levinson, Stephen C., 1988, "Putting Linguistics on a Proper Footing : Explorations in Goffman's Concepts of Participation," in P. Drew and A. Wooton (eds.), *Erving Goffman*, Oxford: Polity Press.
18) Ochs, Elinor, Emanuel A. Schegloff and Sandra A. Thompson (eds.), 1996, *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
19) 宮内　正, 1991,「儀礼秩序の仕掛け」安川　一編『ゴフマン世界の再構成』世界思想社: 65-99.
20) 宮内　正, 1995,「ディスプレイという規範」笠原清志・西原和久・宮内　正編『社会構造の探求』新泉社: 295-318.
21) Schegloff, Emanuel A., 1988, "Goffman and the Analysis of Conversation," in P. Drew and A. Wooton (eds.), *Erving Goffman*, Oxford: Polity Press.
22) 山崎敬一編, 2004,『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣.